

武家耳底記に云ふ。淺香左馬助三卿は、元は勢州北畠具教の臣湯淺嘉兵衛が子なり。國司滅亡の時、嘉兵衛討死して、嘉兵衛が妻、左馬助を胎内に持ちながら、蒲生氏郷の家來水野三左衛門が方に來嫁して、左馬助を生みければ、水野少次郎と號しけり。容顏美麗類ひなければ、氏郷子小姓に呼出され、出頭し、心ばせの事ども有りて立身し、奥州安積郡安積の城を預けられ、一萬石を領し、安積左馬助と稱し、後淺香に改めたり。氏郷家亡びて後流浪し、慶長の初め石田治部少輔に有付き、淺香三左衛門と號す。石田滅亡の後、再び浪人と成りける處、大坂陣の以前利常卿召出され、家祿三千石を賜はり、淺香出雲と稱し、馬廻組頭をば勤めたり。然るに後織田出雲殿に指合ひ、再び左馬助と稱す。其後七百五拾石の與力士を附けられ、此與力士五人自分仕ひにて、常に左馬助が居宅の式姦に直番す。とあり。混見摘寫に、淺香左馬助は、關原合戦の時石田方にて、水野庄次郎といへり。貼の皮の羽織、銀大釘の前立物の冑を着せり。元來奥州葛西大崎の領主木村伊勢守に仕へたり。眉目形、天下において、秀次公の不破萬作、蒲生氏郷の名

越山三郎、さて此の淺香庄次郎なり。十六歳にて五千石を取り、木村伊勢守身上果て、石田三成に仕へ、三成亡びて後、淺香左馬助と稱し、加州へ召出されたり。とあり。按ずるに、左馬助三卿は、慶長五年關原合戦後流浪し、同十九年大坂合戦以前利常卿に奉仕す。と淺香譜にあり。元和二年の土帳に、馬廻頭三千石淺香左馬助と見ゆ、寛永四年の土帳に、馬廻頭三千七百五拾石淺香左馬助とありて、三千七百五十石の内七百五十石は與力知なり。左馬助の嗣子を作左衛門といふ。其の子も作左衛門と呼べり。皆數子有りて、家祿を配分し或は新知を賜はりて、本末とも數家に分れたり。舊藩中は家族繁昌して、左京が家を宗家とせしかど、廢藩後零落して子孫絶えたりとぞ。

○山崎半左衛門番邸

延寶の金澤圖に、長町六番丁の末、織田小八郎邸地の東側入口角を山崎半左衛門の邸地とす。元祿六年の土帳に、山崎半左衛門永町織田小八郎近所とあり。

○山崎半左衛門傳話

混見摘寫に云ふ。加州山崎半左衛門は、越前朝倉義景の家

老山崎肥前が曾孫にて、彦右衛門が子也。彦右衛門加州にて武功有之、七千石を領しける處、加州を立退き、越後の神子田長門方に客人分にて仕へけり。加州を立退く節、一子を殘し置きたり。此の子出家して善職坊と號す。加州の波瀾寺にあり。善職坊十八九歳の時、波瀾寺大峰入をせし供を勤めたり。越前路にて夜に入り、先きの宿を急ぎけるに、荷物を爲持たる小者共、手振にて跡より走り來り、盗人共多く出合ひて荷物を奪ひ取りたりと、ふるひく申しけり。善職坊是を聞きて、甚だにくき仕形哉、奴原一人ものがすまじと、刀おつ取りかけ出す。波瀾寺法印是を聞き、出家の事何のくるしき事なし、只其儘にせられよといへども、耳にも聞入れず。唯一人立歸り、柿原と云ふ所にて遙かに追付き、山崎彦右衛門入道也、汝等荷物を返すべし。さなくば、悉く撫切にするぞと、三尺二寸の刀を抜きて、大勢にをどりかゝれば、此の勢ひに甚だ恐れ、荷物を打捨て逃行きけるを、大聲を揚げて、汝等此荷物を先きの宿まで持ちはこぶべし。左なくば一在所を滅却し、悉く撫切にせんと大に怒る。此言葉に恐れ、盗人何茂立歸り、荷物をば盜

人三人して背負ひけるを、先に押立て、我が家來共草臥れたり、能き人足を求め得たりと、あざ笑ひ、刀の柄に手を懸け、跡より押付け、れば、盗人共肝を冷し、金津の宿まで送り届け、り。此の時善職坊が勢ひ、たとふるに方なし。後高野山に登りけるに、七持院と無量壽院と公事の時も、命を輕んじ、兎角出家の器量なしとて、無量壽院の執持にて還俗し、利常卿へ召出され、山崎半左衛門と名乗り、家祿千石を賜はる。武勇殊に勝れ、手柄多しといへり。

○山崎小右門傳話

武家耳底記に云ふ。加州足輕頭山崎小右衛門は、越前朝倉義景の長臣山崎肥前守吉家の孫、山崎種善坊の子なり。加州の家老山崎長門入道閑齋も、肥前が孫にて同姓なれば、小右衛門閑齋方に懸り人と成り居たり。大坂の役にも閑齋の手にあり。落城の日、閑齋手合の一番鎧なり。敵鎧を以て小右衛門を突伏す。小右衛門が口中に入りて、左の頬先へ突抜き、石垣に突付く。小右衛門事ともせず、貫かれながら、右の鎧をたぐり來て、終に敵の首を取る。其の功に依つて、利常卿の直參と成る。小右衛門は、隠れなき壯力